

ワシントン DC で災害保健医療対応に関する国際シンポジウムを共同開催しました。 (2014/5/21-22)

場所：ジョージワシントン大学マービンセンター、ワシントン DC、米国
テーマ：「災害保健医療対応に関する国際シンポジウム—兵庫行動枠組みの見直し—」

5月21日（水）から22日（木）にかけて、2015年の世界防災会議において審議される兵庫行動枠組みの改訂(HFA2)について、災害医療国際協力学の江川新一教授を中心に、日本学術振興会ワシントンオフィス、ジョージワシントン大学、米国軍保健衛生大学／災害人道医療支援センター、米国国立小児病院とともに「災害保健医療対応に関する国際シンポジウム—兵庫行動枠組みの見直し—」(<http://hfa2-symposium.cdham.org/>)を開催しました。

5つの主催団体が平等な立場で、それぞれの役割を分担しあう core-planning group として毎週国際電話会議を行い、1日目の分科会は約80名、2日目の分科会は約120名の参加を得て盛況かつ活発な討論が行われました。通常のシンポジウムとは大きく異なり、日米をはじめとしてフィリピン、インドネシア、スリランカ、イスラエルの災害医療関係者、UN-ISDR STAG, WHO, OCHA/INSARAG, PAHO、世界銀行などの国連組織関係者が一同に会して、2015年3月の世界防災会議で審議されるHFA2にいかにか“健康”を“リスク減少・リスク管理”の目標としてとりこむかが話されました。事前に、①行動枠組みと政策決定、②災害弱者、③メンタルヘルス、④インフラとロジスティクス・資金、⑤教育と訓練の5つの分科会に分かれ、Base Campと呼ばれる資料提示と討論の場を提供して、提言を各参加者に提出してもらいました。1日目に co-leads（座長）と facilitator（議論促進援助者）とともに一定のフォーマットに基づいて分科会としてのまとめを作成し、2日目に全体討論として各分科会でのワークショップの成果を発表したのちに、UNISDR-STAGのMurray教授がその成果をどのように受け止め、国連に提示できるかという総括になりました。議論の枠組みが直前まで決めがたい面もありましたが、国際社会において参加者の意識と活発な討論がひとつの方向性をもって、健康こそが守るべき最大の目標であり、災害対応だけではなく、気候変動、貧困と資源の欠乏、急速で不安定な都市化、生物多様性の喪失などによって増え続けている健康危機に対するリスク減少・リスク管理も、健康の指標に基づいて成果を評価すべきであることを提言としてまとめ、強く世界に発信していく合意を得ることができました。

より効果的な災害対応をするためには、事前のリスク評価と備えが大切です。これまでの行動枠組みでは、“安全な病院”だけが健康に関係する言葉でした。これをさらに構造的、機能的に強化することも大変重要です。また、高齢者、妊産婦、小児、障がい者、慢性疾患罹患患者、外国人など災害のときに特別なニーズを必要とする人や、災害時のメンタルヘルス、災害保健医療コーディネート、保健医療を支えるロジスティクス、標準化され登録制度をもつ災害対応チームの確立など他分野と共同して備えを進める必要があります。

災害のときに最も早く、かつ重要な対応は地域社会によってなされます。医療従事者だけではなく、地域全体の保健・医療・福祉の観点からリスク減少・リスク管理をしていくことが、人々の暮らしを安全で安心なものにします。

このシンポジウムの企画、開催を通じて世界中の災害保健・医療、国連機関の関係者とのネットワークを構築することができました。HFA2に反映させていくことは勿論ですが、災害に強い医療供給体制は、普段からの医療や福祉が発達している社会であることを念頭におき、さらに国

内外の協力を高めてまいります。



開会宣言をする江川新一教授



WHO 代表 Dr. Arturo M. Pesigan



分科会 1 の座長：東京医科歯科大学 大友康裕教授（左）、ハーバード大学 Prof. Frederick “Skip” Burkle



分科会2の座長：東北大学メガバンク機構 菅原準一教授（右）、Former US-DHHS Dr. Kevin Yeskey（中央）



分科会3の座長：災害精神医学 富田博秋教授（中央）、USUHS Prof. Robert Ursano（左）



分科会4の座長：WHO Sri Lanka Dr. Arturo Pesigan（前列中央）、USUHS Thomas Cullison（前列右から2番目）



分科会5の座長：インドネシア Thamlin 大学
 Prof. Abdul Radjak（左），USUHS Prof.
 Charles Beadling



日本大使館で開催された懇親会において、歓迎
 と支持のご挨拶をいただいた山野内勲二 経済
 公使 (Minister of Economic Affairs)



2日目の全体討論で Key Note Address を行
 う OCHA Mr. Terje Skavdal



厚生労働省 三浦公嗣 技術総括審議官の挨拶
 文を代読していただいた米国日本大使館 野崎
 伸一書記官



分科会1の総括報告をする Prof. Burkle
座長と Facilitator が登壇し、40分の発表と
20分の質疑応答が進められました。



防災風呂敷をコミュニティーレジエンスの方策
のひとつとして披露する組織委員（左から日本
学術振興会ワシントンオフィス 下村理教授、
USUHS/CDHAM Prof. Charles Beadling、
江川新一教授、
米国小児病院 Mr. John Walsh）

すべての分科会の報告を踏まえて UN-ISDR
STAG として世界防災会議にむけた展望を総
括する Prof. Virginia Murray



すべてのスケジュールの最後に登壇し、記念撮
影をする組織委員（左から USUHS/CDHAM
Prof. Charles Beadling と Dr. Metin Demir、
George Washington 大学 Prof. Anthony
Macintyre、日本学術振興会ワシントンオフィ
ス 下村理教授、米国小児病院 Mr. John
Walsh, 江川新一教授）

文責：江川新一（災害医学研究部門）